

じぎょう

# 自業のすすめ

自分ならではのビジネス&ライフスタイルで

誰かのためになり、人生にバランス、社会に多様性



1995年からの20年と、2015年からの20年。デジタルライフスタイル社会から、AIライフスタイル社会への入り口に立つわたしたち。今ある仕事の約半分は人工知能やロボットに代わるという調査結果はそのほんの一端。ビジネスの種類・あり方、働き方、生活の仕方、どれもが、今の延長戦では考えられない近未来。人間ならではの、他の誰でもない自分ならではのの仕事と人生の創造、ライフワークを掴む道程。葛藤を許容し、超然と構えて進む先に、自分ならではの仕合せ。

リー・ヤマネ・清実

Lee Yamane Kiyomi

じぎょう  
自業のすすめ 目次

1 自業のすすめ 二〇一六年三月二十五日ホームページ掲載

2 へ自分ならではのの知り方 二〇一六年三月三十一日ホームページ掲載

3 へ自分ならではのの起ち方 二〇一六年四月十四日ホームページ掲載

4 へ自分ならではのの受け容れ方 二〇一六年四月十一日ホームページ掲載

5 へ自分ならではのの究め方 二〇一六年四月十九日ホームページ掲載

6 へ自分ならではのの終り方 二〇一六年四月二十二日ホームページ掲載

自業の精神を後押しする先達・書籍 二〇一六年四月十三日ホームページ掲載

あとがき 二〇一六年四月二十二日

# 1 自業のすすめ

じぎょう

- i 自業という言葉
- ii 時代の流れ、社会の変化
- iii 先達の予知
- iv 四%の顕在、九六%の潜在
- v 問題意識
- vi 時機・タイミング
- vii 絶妙の出会い
- viii 終末の自画像

## 業 (広辞苑)

「じぎょう」 しごと、わざ、くらしの手だて・なりわい・つとめ、学問・技芸

「ごう」 (仏)行為。行動。身(身体・口(言語・意(心)の三つの行為(三業)

「なり」 生活のための職業、生業。なりわい

「わざ」 神意のこめられた行事、深い意味のある行為、つとめとしてすること、

しかた・方法・技術、仏事・法事、こと・ありさま・次第、他

## 1. 自業のすすめ

### 自業という言葉

自業は「じぎょう」と読みます。そのコロは、「自分にとって、自然に気が向き、労苦をいとわず、たのしく感じられて、誰かのためにもなる業（なりわい）を一生の仕事として人生を全うする生き方」。平たくいえば「自分ならではの仕事とライフスタイル」。自分自身の才と可能性を無理なく拓く道、型です。

「自分ならでは」は、「自分文化」にあたります。個々人の持つ生まれた資質と、その資質が生活環境の中から掴みとり育んでいく価値観、思考様式、行動規範。その人の生活文化。よくもわるくも誰もが自分の文化を培っています。社会生活は常に「異文化」の交わり。

かつては「二億総中流」といわれた社会も今は昔。格差が定着した社会ですが、多様な生き方を許容する社会にもなつたと言えます。デジタルな社会、AIな社会がこれから働き方生き方をどう変えていくかは想像を絶しますが、先行きの選択はきわめて個人単位で迫る世の中になることは間違いないありません。

「自分ならでは」の仕事で誰かのためになり、自分に合った暮らしをする。これこそ、「いい暮らし」ではありませんか。

### 時代の流れ、社会の変化

日本におけるインターネット元年は一九九五年。電車内の八割が立っていても座っていない人も、ずっと顔を向けてゲームやSNSに気をとられていた。二十年前でここに至った社会です。日本における人工知能元年は二〇一五年と云うことになりそうです。

前年二〇一四年八月に「ワトソン」のことが新聞で紹介されて以来、人工知能のニューリスを追っています。インターネットが社会に広がり始めた同時期に脳型コンピュータや人工知能の開発も試みられていて、関連する本を読んだものです。「人工知能のインパクトが想像できるのです」。

二〇一五年十二月に野村総研が発表したレポート。今後十年から二十年の間に既存の仕事の半分ほどは人工知能やロボットに代わるといふもの。代わらないのは、「創造性、協調性が必要な業務、非定型的な業務」。経営コンサルタント、中小企業診断士はその部類に入っていました。

「自分ならでは」の視点や問題意識、感性、知識や技能などを総動員し、人間ならでは、「自分ならでは」の業を創造し、生き暮らす。自分ならではは究極のサバイバルかもしれません。

先達の予知

持つてうまれた資質と条件がそうさせるのか、独立を思い立った時から、他の人には、その簡単にできない、わたしだからこそできる業のカタチってなんだろう：「と考え続けました。「人と同じということにみんな安心するんですよ」と誰かが言ったとき、ああ、そういう感覚、センスはまったく持ち合わせていなあと気づいたものです。他の誰でもないへわたしへがやるべきこととは何か。」

二〇一〇年秋、日経新聞の下段に目ごとまりました。本の広告です。『1991-2003 ドラッカーの講義』（アチーブメント出版）の一文が紹介されていました。「自業」の後押しを得たようで、切り抜きは今も大切に」とってあります。

「人類の歴史上初めて、私たちは自分自身を経営する責任を負わされるのです。これはおそらくどんなテクノロジーよりもはるかに大きな変化です。(略)当面は非凡な能力を持つ人たち何らかの貢献をしたい、先頭に立って充実した人生を送りたい、この地球における自分の存在に何かしらの意味があるのだと感じたい、と考えることでしょう。彼らは、数年前にごく一部の超人だけにかわっていた何かを学ばなければならなくなるでしょう」

四%の顕在、九六%の潜在

今のところ、宇宙全体が何でできているか、わかっているのは約四%にすぎないといえます。人間のことも、わかっているのはその程度ではないでしょう。か、医学的にも人文科学的にも。文化、文明が発展するごとに、いかにわかっていかなかったかが、わかる。友人知人どうし、互いに相手のことをわかっていない度合いも四%程度とふれば、未知の発見のたのしみがある。

自分のことだって、わかっていないのは四%程度かもしれない。自分では当たり前前すぎて、意識しないもの。他人が自分を映す鏡になり、時に直接指摘されて、喜んだり落ち込んだり。そうして少しづつ、自分ならでは、手繰り寄せる。できれば早く、「どころんでもこれが自分！」と認め、へ自分ならでは、の発見を発展の途につづきたいものです。

へ自分ならでは、の核心は持つて生れた資質あるいは本質。本質を辞書で引くと、「そのものを成り立たせている独自の性質、あるいは内奥に潜む恒常的なもの」。あなた自身を成り立たせている本質が、外の世界と接点をもち、未知の自分を拓き、自分史、「自分文化」史をつくっていく。発見と発展の愉しみがそこにあります。



絶妙の出会い

起業は簡単、継続は至難。へ自分ならでは  
 の業となると、なおさらです。「自分文  
 化」がはっきり表し現れるほど、共感共鳴  
 する層もはっきりしてきてくる。出会った人の  
 二割程度を了解しておきたいもの。ただし  
 実際に顧客となるのはそこからさらに約二  
 割、全体からすると四％程度とふんでお  
 く。一〇〇名の四名程度。

そのうち本当に長い付き合いになるのは  
 さらには半分というのが経験則。よって、目  
 に見える利益は小さいかもしれない。でも  
 もそれと仕事を超えた個人としての信頼関係  
 いど、仕事を超えた個人としての信頼関係  
 係。よくこの人と出会ったものだと思え  
 る。出会う人の履歴書は人の履歴書を読  
 むと、人の履歴書は人の履歴書  
 だとつくづく思います。人の履歴書  
 「類は友を呼ぶ」とはよく言ったもの。  
 同じ社会に住んでいても、住む世界は異な  
 る。何に善しとして、どう振舞うか。生活  
 文化を共感し合える人たちがどこかにいま  
 す。自分を表して、自分の時間が動くうちに  
 「類」の誰かと自分の時間と空間が交差す  
 る。その時点が自分の時間と空間が交差す  
 る瞬間のスキ間に出会い、絶妙の出会いが  
 れているのです。絶妙の出会いが組み込ま

終末の自画像

「人生の終わりを迎えたあなたはどのよう  
 境、状況で最期を迎えたいですか」。こう  
 尋ねて、直感的に浮かんだイメージ、ある  
 いは言葉を行って書く。ここにその人の価  
 値観や人生観が表れます。創業塾などでま  
 ず最初に受講者が表れます。創業塾などで  
 場面です。その最終型へ向かって進むとい  
 くのが人生。自業、起業の目的も、そこを  
 踏襲していかないければ意味がありません。

終末の自画像を尋ねて返ってくるのは  
 もちろん、十人十色。「ハワイに移住して  
 のんびり暮らしながら最期を迎える」、  
 「ま、これ現実的なものから抽象的なもの  
 きとる」。現実的なものから抽象的なもの  
 までの本当にその人ならではの人生観がよ  
 く表れます。二〇〇四年頃の答えは今も印象  
 に残っています。女性の答えは今も印象  
 「フーテンの寅さんみたいな人生を送っ  
 て、いる」。若くて愛らしい人から出てくる  
 答えと、その何かが超えたいものがある。怪  
 訝な顔でそのココロを聞き返して、二の句  
 に「ついでに、長生きは彼女は遺言的な難病を抱  
 え、ついでに、長生きは彼女は遺言的な難病を抱  
 えて、自分のためだけに生きたいもの、超然と構え  
 て、自分のためだけに生きたいもの、超然と構え

## 2 へ自分ならではの知り方

- i 「われは何者か」
- ii 思考の型
- iii 役割の型
- iv 理由なき好物
- v 記録せず記憶
- vi 先人の教え
- vii 自分に見せる

宇宙に比べるべき容易ならざる大切なものが、自分自身の中にもあるの  
である。それらのもについて私たちは何を知っているであろう。実は何  
も知ってはいないのである。

— 中井正一「美学入門」









記録せず記憶

「自分文化」、人間観、社会観などを自  
分に尋ねると、おのずと過去の象徴的な場面  
になりま。特に過去の象徴的な場面。は  
るか昔のことなのに、今も鮮明に憶えてい  
る。光景、人に言われたこと、など等。記録  
はしてないのに記憶していること。そこ  
に「自分文化」の芽がありま。子供の頃  
から社会に出てからのいくつかの場面。そ  
れらを今にたがひ合わせると、「われは何  
者か」の一端が見えてきます。

例えばこうです。小学二年生の夏休み。  
太陽が一番高い昼下がり、裏庭の縁台にの  
そべり、ひとり空を見る自分。雲はあつた  
かなかったか。ただボーと何を考えて眺め  
ていたのやら。しばらくして今後は地を見  
る。蟻が列をなしてキャラメルのかけらを  
運んでいる。その行く先を目で追っ  
る。小さな蟻たちが今ここにこうしてコッ  
コツと生きる営み。

今に至る原点がそこにあると、自分に目  
が開いたのはそれほど前ではありませ。そ  
の他にもいくつかの記憶が現在を物語っ  
る。そう思えるということは、へ自分ならで  
は、の道を外してはいないという。外し  
ていても、それもありなんと思える人はそ  
れでよし。それでない人は自業の道を真剣  
に考えた方がいい、自分を守るために。

先人の教え

日常の中に哲学がある。そう気づいた瞬  
間がありました。二十年前のことです。一  
緒に仕事して、自分だけに楽しようと  
する相手。自分さえよければいいのかと憤  
慨する気持ちの一方で、感情的になつては  
意味がない、精神衛生上よくないと思う。  
理性的にとらえて、一つの人間学習する。考  
えてみれば、社会生活はそういう場面の連  
続、哲学の時間は日常生活の中にあるものな  
だ、と。

「モンテニユ初代エッセイストの問い  
かけ」(荒木昭太郎 中公新書)は、モン  
テニユの魂が茶者にのりうつたような  
力作で、モンテニユの金言が小気味よ  
く、味わい深く紹介されています。読み返  
して、次の一文が目飛び込みました。  
「ひとりひとりの人間は、もし自分をこまか  
く観察する能力を持って、いるならば、自分自身  
にとつてひじょうによい教育材料となる」

自分観察。へ自分ならでは、を知る一番は  
それではないでしょうか。自分への関心  
は、人への関心につながります。自分に対して  
見過ぎていたことを見とり、ならば人  
はどうか、と気にとめる。何かを感じ、考え  
る。その経過を書き綴ると、「人間は見え  
るもの、動くものに反応する」(アラン・



### 3 へ自分ならではの起ち方

- i 住む世界を変える
- ii 天が計らう
- iii 見聞をかさねる
- iv 自答自答する
- v 段取る

海に詩が溶け込んでいます

土に詩が埋もれています

空に詩が満ちています

ヒトにも詩がひそんでいます

見つけるのは難しい

どの詩もまだうまれていませんから

— 谷川俊太郎

### 3. <自分ならでは>の起ち方

#### 住む世界をかえる

「起業なんて簡単さ、電話をFAXとパソコンさえあれば家でだって始められる。問題はここだ！」

そういつて右手の人差し指を自分のこめかみにあてた先生。日本で活動するニュージブランド出身のジャーナリスト。ビジネス英語の初授業で受講者の入学動機を聞き終えた彼が、なんとも不思議そうに、「どうして就職することばかり考えるんだ、どうして自分でマネジメントすることを考えない？」。これに受講生がブーイング、そんな簡単じゃないと。そこで出たきた言葉とポーズ。問題は頭、アイデアだと。それでも反発していました。

まさかその当人が今こうしているとは思っても寄らないでしょう。会社を辞め、一年の遊学をきめこみ入学した学校。外資への再就職を目的とした社会人向けのコース。外資へ再就職を願っていたわけではなく、受講は休職の口実のようなものでした。他の受講生の動機に合わせる必要はなかった。先生の言葉に一番反発していたのは、自分でも独立するなんて微塵も頭になかった。自分でも一番反発したというところは、どこからだと思えます。

会社が湧いたから理由は、安定した状況に疑問が湧いたからです。これは性質として、こいのようなダメだと感じるようになる。根が傲慢なのか、安定からは潜在的な能力が引き出されないか、暗黙のうちにわかってきたのか、ある段階で自分を問うようになる、やっかいなことに。その気になってしまっは、もう辞めるしかない、次が決まっていなくても。一九八九年一月のことです。昭和が平成にかわった、その月。

退職を決め、自分にとってのリフレッシュ休暇と位置づけたこの一年。ふりかえれば、この間が人生の大きな「間」、大転換点となった。入学した学校での新しい人との出会い、平日のビジネスアワーの街にみる見慣れない光景、夏休みに短期語学留学で訪れたイギリスでの経験、その間に小旅行したフランスでの出来事。どこへ行くかと変わらない自分、そして変わる認識。

これまで属する世界をぬけて、別な世界に入ってみましょう。未知だけど嫌な気はしない世界。学ぶ場なのか、働く場なのか、はたまた、遊ぶ場なのか。それぞれ事情に合わせて、あるいは、向こうからやってくる機会を受けて。これまでも億劫になるのに、そうならないのが「間」、転換点。軌轢や葛藤も少なくないでしょうが、それもうまくやりすごせて、未来の糧を得るはずですよ。

天が計らう

住む世界をかえた時から、自分の世界が動きだしています。自分が動かしなかった世界を、住む世界をかえて、後になつたこと自体が不思議なぐらい。ほんの半年前でさえ、思いも寄らなかつた決断をして、いるま自分で、不安もなくはないけど、それは表向きで、心の奥では意外に平気。

心境の変化。なぜか心の環境が変る。それを紐解こうとすると、分析的にも時間的にも無理。こういふ時、天の思ひ召し、書いた、時機。タイムイングとはこういふことが、心動き、主体は自分なので、自分が天がそう計ってくれていると思うと、勇気が、希望がわいてきませんか。

「神託をはじめとするあらゆる種類の占いは、社会的に重要な役割を果たしているようである。個々人の予測をひとつの集団用出口へと導いてやることによって、予測が実現するチャンスを高めているのだ」

フランス生まれの数学者イーヴァル・エクランド「偶然とは何か 北歐神話で読む現代数学理論全6章」(創元社)の一節で読む。学者の中で一番おもしろいのは数学者

だと他の学者が言っていました。占いも自分を動かす一つのツールとあっさり言うあたりが、そうかもしれない。

心境が変わり、住む世界をかえ、新境地を開く。新しい自分の世界に出会うと、新しい人との出会いが待っています。その人との出会いが、自分ならでは、その人との出会いを感じる。ひよっとすると、そのこれまででない決断をしたのでは、ないか。後々にそう思い返すことだってある。

「自分の生涯をふりかえってみると、どっちも生きてくるのに、まるで綱渡りのように偶然の出会いを重ねてきたような気がするものだ。あそこまで思いきってあれをしなかつたとき、あの本を読まなかったら、自分の人生がまったく変わったものになっただろうと思うのである」

「偶然性と運命」(木田元 岩波新著)のあとがきの一節です。なぜこのテーマなのかを語っている部分。世界的に有名は大哲学者もこのテーマについて考えているけど、著者いわく、彼らも自分と同様、もてあまして、このテーマがあると。そこで他者の言葉を借りてこのテーマを結んでいます。

「邂逅！ それのみが真実を開示する。人間の新生も、死よりの復活も、偉大なる邂逅として以外には絶対に把握されない」

見聞をかさねる

多くの人が働いている合間に、そうでない人たちがいる。当たり前前のことですが、一年間の遊学で気づいたことの一つです。

平日のビジネスアワー。混み合う時間をさけて午後一時半ごろに入店したレストラン。北浜にあった三越の特別食堂。午後の授業を休み、三越劇場で上映される映画を観に出かけたときのことです。店内に案内され、目に入ったとき右手奥は中年女性5名ほどのグループ、左手奥には一人の老紳士。女性たちの華やかさと、小柄だけど濃厚さを醸し出す老紳士とのコントラスト。

スーツ姿の老紳士は近くのお偉い人か、一人でゆったりと昼食。こういう日常もあるのだと見せられていた。この一幕が、今も目に浮かびます。ずっと忘れず記憶にあるということは、たぶん、この時、瞬間にあるという中で、一つの思いが走った、自分があの老紳士の側にいかなければと。

ある日の百貨店、店内の休憩コーナーやソファに、所在なげに座っているお年寄り。買い物で疲れて休んでいるという風に見えない。家に居場所がないのか、家族の干渉をうけたくないのか。

百貨店にはこういう機能のあるのだと思っただけです。会社の中で仕事している

と見ることもない光景。同じ社会、同じ時間。でも、違う「住む世界」。当たり前前のことが、自分の認識として、視点として、持つようになった。そのことが、追って、自業を志す伏線になった。今こうして時間が経過してみると、よく見えてきます。過去の流れが。

秋たけなわの頃。朝の通勤途中、梅田から乗った満員バス。堂島川ぞいを走り信号待ちで留まったのはグラランドホテル前。ほんの数分のこと。つり革に体をまかせ、ぼーっと外を見ていた目の前のホテル玄関。中から男性三名が出てきた。平日の通勤時間帯、ラフな服装の彼ら。ただし経営者然とした印象。出張の合間なのか、それにしても、自分の裁量で生きているという自信のような、ゆとりのような、笑み。

一年の遊学をきりあげ、新聞の求人広告で応募した外資。年齢制限は越えていたけど、ダメもとで、手紙を添えて履歴書を送った。面接通知、手紙を添えて履歴書を「住む世界」を変えたものだと思います。でもよく採用された。一年、まずは再就職をしたことがまた、次の展開をつくることになった。入社して五ヶ月がすぎた頃か、結局勤める限りは日本企業も外資もかわらない。という思い。そのタイミングで目の当たりにしたバスからの光景。

わたしもむこう側へ行かなければ：

見聞きした先に至る人生の選択と決断。

自問自答する

自分でマネジメントする。ほんの一年前は反発したことを決断するなんて、わからぬいもので、自分の心さえも。ニュージランド出身のジャーナリストの発した言葉がにわかには信じられない。現実の示唆となつて、自分を問うことになる。さて、何をどうするか、考えなければいけない。

人生の転換点です、独立して仕事するといふ決断は、ただそれほど深刻さはない。その不安や迷いは起ころない。前向きに悩んだとしても、後ろ向きになるようなことは、まだその時機ではありません。こういふ時、自分の決断を人に打ち明ける。おそろく人生の決断自体を誰かに相談することは、必要ありません。打ち明けるなら相手を選ぶ必要もあります。

「なに考えてるの、そんな、自分でやっていくなんて、世の中、甘くないよ。今の会社でよくしてもらっているのに、なんで辞めて、自分でやる必要があるの」

ちようど決断をした時期に会った知人から論されました。相談して、呆れられた。

この時何を感じたか。

もし自分が誰から同じようなことを打ち明けたら、けっしてはこうは言わない。人生の大きな決断をするからは、そう簡単に立ち入ることはできない。心配なら心配なりに、決断を尊重しつつ、何か今後のためになるようなことを言おう。

今となつてはその知人も見守ってくれて、いつかは、「偉いなあ」と言ってくれた。続けてきた結果ですが、続けてこられたのは、やはり、自分の信じていること、自分のやるべきこと、考え、そのあり方を追いつめて、とうにやめていたはず、小さなハードルも越えられなくて。

自分ならではのVの仕事、それは何か。決断した時からずっと頭の中を占めます。入社してからも、会社を八ヶ月で辞めることになるのですが、退職願を出す前から、通勤の行き帰りに、ずっと自問自答。退職した一九九一年一月以降も頭をめぐらせ、のべ三ヶ月ほど経ったある日。

ああ、それだ！

外出からの帰路、駅を出て数分歩いたある瞬間、頭の中に自分のやるべき仕事のカチが一つのまとまりとして、パツと浮かんだ。ネーミングはもっと後です。

机の前ではなくて、別な何かをしながら徹底して考える。必ず閃きあり。

### 3. <自分ならではの>の起ち方

## 段取る

独立して何をやるか。自問自答中に気づくことは、もっと勉強しておけばよかった、ということがある。おカネが限られると、一番の資源になるのは「頭」。ニュージランドのジャーナリストが言ったとおり、自分の知、アイデアです。

おカネをかけず、自分の才覚でやれる仕事：頭のなかでは、過去の自分の仕事ぶり、経験、人から言われたこと、評価などが駆け巡ります。どこに自分ならではの、あるか、仕事のカタチにどうできるか、など等、「SWOT分析」のことはまだ知らなくとも、同じようなことをしていたわけです。頭の中で、それに三ヶ月要した。

そうして至ったのがパーソナル・アシスタント。このネットミングは、頭の中で仕事のカタチが閃いてからさらに一ヶ月後のこと。自分で自分にとって、しっくりくる言葉を探す。大切な要素です。自分ならではのVを表

一般的には知られていない業称。当時説明しただけでもピンときたのは、デザイナー。人だけ。でもピンときたのは、デザイナー。やってきた。なぜか。それは「パーソナル・アシスタント」はわかっていなかった。元勤務先だったか

「たぶん、パーソナル・アシスタントは、どうでもいいわけです、先方にとつては、どんな役割をしてくれるか想定できるところに、独立したというから、依頼した、ということ。」

サービスの質が想定できて、人柄もわかっている。普通こうはいかないので、それらを測るための根拠が必要。資格は、それを保証するものではなく、過去の努力に對する一定の評価。この努力の結果について、社会が期待して、機会を与える。

何らかの専門性、それを表す根拠。それを獲得するための努力、学習。さらに、専門性は同じでも、自分ならではのものを磨いていくための多様な学習。それらの段取りが「一番大事」。

「中小企業診断士をとったんだったら、紹介し

個人には資格に意味を感じた。個人でも診断士取得を聞きつけた元勤務先の上司が、意先の中小企業の後継者育成を頼んできた。その際にも、自分自身は、少しいないけれど、他の多くの人には、意味を感じない。

とは、いえ資格は未来を保証しません。学習の蓄積、刷新こそ、資格の後光。

## 4 へ自分ならではの受け容れ方

- i 自分を疑うとき
- ii 揺らぐとき
- iii 不安なとき
- iv 悔むとき
- v 先がみえないとき
- vi 人を羨むとき
- vii 軽んじられたとき
- viii 理解されなかったとき
- ix 人の成功法をすすめられたとき
- x 前途を問われたとき
- xi 褒められたとき
- xii へ自分ならではのを受け容れる

離見の見にて見る所は、すなはち見所同心の見なり。  
その時は、わが姿を見得するなり。

— 世阿弥 「風姿花伝」



不安なとき

「自分ならでは」が不安になるとすれば、人に受け入れられないと感じた時ではないでしょうか。自業をスタートさせたばかりの時は、たくさんの人に知ってもらおうと思うものです。

学生時代の先輩に誘われて出かけた懇親会。会社員たちの異業種交流会。前の席にすわった大手企業の営業マンが尋ねる、「何されてるんですか」。簡単に説明する。「へえ」。わかったようなわからないような表情。隣から「お客さんはどのぐらいいらっしゃるんですか?」。「まだまだほんのわずかです」。そんなやりとりで酒宴が進んでいく。何か違う。胸騒ぎのようなものが少しづつ身にまとわりついてくる。帰り道も、翌日も、しばらく何かしら不安なムードに包まれる。いったいこれは何か。

行き場所を間違えたのです。自分でマネジメントしようとして、される人とは「文化」違います。初めてでも、自業を簡単に説明しただけで、「そうそう、これを簡単に説明したビジネスが必要なんですよ」と話が広がる場もある。

自業を進めて不安になったら、相手を間違っていないか考えてみましょう。社会を鳥瞰しましょう。活躍のフィールドは別にありそうです。

悔むとき

「自分ならでは」の道を究める、そう決めたことを悔やむとすれば、その道に進んでまだ間がないからでしょう。「こんなはずじゃなかった」と、呆然とする。そこで、「自分ならでは」の道から外れますか? 止められますか?

もし外れたとしたら、独自性がなく、その他大勢の中に埋没します。止めるとすれば、葛藤がついてまわります。「自分ならでは」の働き方、生き方に舵をきった時、人生の大きな選択をした時のことを思い出してください。当時、何故そうしましたか。何を求めて今の道へ入ったのか。「自分ならでは」の道を止めて、未来の自分に誇れる未来を創ることができるか。

そう自分に問い、原点を確かめる機会です。悔やむときは、止めるか?と自分に尋ねて、そうすると答えたなら、それもよし。行動してみてもわかった自分の本心。「いや、戻らない」と答えたなら、「自分ならでは」の覚悟を決めた瞬間。

悔やむときは、まだ自業まもないとき。早々に悔やみ、本心を見定め、自分にとって意味ある生き方をする。行動するからこそ、そういう局面が訪れる。やはりじっとしてはいても始まりません。



4. <自分ならでは>の受け容れ方

軽んじられたとき

と相手からは、何かしらというのには、関係の中  
 で、自分優勢にしたくないよがある。素がある  
 いは、ついでに。基本的には、対等かつ丁寧  
 ちら側にある。社会的なマナー。軽んじられ  
 に、接するのが社会的なマナー。その理由を  
 て、ただ憤慨するのではなく、その理由を  
 突きとめた。たいものです。軽く  
 のか、単に誤解しているのか、あるいは、  
 か、扱いたくなるように。ビデオの法則による  
 く扱いたくなるように。ビデオの法則による  
 のか。有名な「メラビアンの法則」による  
 と。プレゼンの効果は見た目の声話し方  
 左右すると。効果は見た目の声話し方  
 左が。あったところ。はしれない。相手人間性  
 題が。あったところ。はしれない。相手人間性  
 や。意図したところ。はしれない。相手人間性  
 な。いし、立ち入ることもできず、いつもこの  
 ら。いし、立ち入ることもできず、いつもこの  
 を。貫けばいい。態度をかえ、いつもこの姿勢

追って、この場面を親しい人に話してみ  
 。その感想や意見や努力が足らない、味  
 。仕事への研究や努力が足らない、味  
 。身だしなみや立ち振る舞いに雑さ  
 。あるのかもしれない。自身をよく見直  
 し、自分ならでは、をよりよく引き出して  
 いきましょう。

理解されなかったとき

「そんな簡単にわかってたまりますかいな」  
 わかってもらえないと溢しているのが、拍  
 恥ずかしくなる。一撃。パッと目が開き、拍  
 子抜けするほど、そりゃ、そうだ！  
 たしかに理解されない、受けとめられて  
 いないと感ぜると、精神的なストレスにな  
 ります。憂鬱になり、胸のつかえが  
 とれない、嫌な気に包まれます。不甲斐な  
 ない自分を恨めしく、責めるような感覚にも  
 なるかもしれない。責めるような感覚にも  
 しかし、多くと語ったからと言って相手  
 に受け入れられないとは限らないし、多くを  
 語らなくて理解し合える人もいます。理解は  
 うしていません。価値打ち合はわかる。そうい  
 う人もいます。

自分ならでは、の業で誰かのためにな  
 る。その使命感がブレず、努力していれ  
 ば、遅かれ早かれ、理解し許容する人たち  
 に出会えます。観察と学びを怠らず、人の  
 使えるものを創出する努力。その積み重ね  
 が、独創性につながる。生みの苦しみはあり  
 ますが、必ずカタチになります。

その過程を淡々と表し、伝えていく、そ  
 の努力もまた欠かせません。理解し合える  
 人に出会うための責務です。

人の成功法をすすめられたとき

人はけっこう残酷なもので、そう簡単に理解できるはずもないのに、ああすればいい、こうすればいいと安易に助言する人がいます。

自業を始めて間もないとき、「なんで営業しないんですか、もっと売り込まない」と！「と知人にハッパをかけられ、その気もないのに、ズルズルと乗ってしまっただけとあります。「持っているもの」とやっ

ていることがズレて、どこかチグハグ。これでは、へ自分ならではへにはなりません。売り込みが様になり、違和感のない人は、人に言われる前にやっっているもの。

人の成功法は人のもの。学ぶことはして、真似てはいけない。どこかにズレが出て、これを見逃さないのも人。へ自分ならではへ程度の程度が見透かされます。もしも魔がさして、やっつて、失敗したと感じたなら、それも悪いことではありません。自分を知り確認することになり、一つの収穫。

「その方法が本当にわたしのためになると思えますか？」

安易に助言する相手にはこう切り返してみましよう。場の空気は一変するに違いありませんが、それぐらいいは受けてたいたいもの、人生をかけているのですから。

前途を問われたとき

人の未来について問うのは、ずいぶん立ち上ったことです。親や学校の先生、本当に親しい友人や知人、あるいは経営相談をしたコンサルタントが問うのは、そういう役目や関係だからよしとしまししょう。親しくもなく、基本的には対等な立場の人から、「これからどうするんですか？」などと尋ねられたら、「余計なお世話ですか？」と返したところ。」「どうしまししょうかね」と受け流して、話題を変えましよう。

そうせず、真っ当に応じた方がいい場合もあります。親しくもなく、初対面でもいあるのに、直感的に何かしら話してもいいと思える相手。そういう人には素直に語りてみる。すると、思いがけないアイデアや視点を示してくれず。自分では漠然としたままなのに、行く末をリアルに語ってくれたりする。

へ自分ならではへを志向する人は、強情だけど素直

これは、と思えば、やけに素直に人の話を聞きいれ実行する。だからこそへ自分ならではへに磨きがかかるというものです。強情だけど素直。否、強情だから素直。

自分の軸を備えること、それが強さと柔らかさのバランスをとるのです。

褒められたとき

お世辞を言う人はけっこういますが、心から褒めている場合はわかるものです。

「こういうことを、そう簡単にできる人はいません」

「この部分の文章は、本当に頭のいい人の書き方」

「それは天性のもの」

「そういう風にわかる人は稀」

「パッとみて、ただならぬ人という感じがする」

もし、このようなことを相手から真顔で言われたとすれば、気をよくしたままに終わってはいけません。特に自分では何気ないことに對して褒められたなら、頭に留め、あとで記録する時間をもつこと。褒められた内容について考え、書く。この時間と行為が大事です。観察の目を利かせ、自分ならでは、を紐解く機会です。から、ちゃんとお褒めする人がいてくれたなら、そのこと自体、貴重だと思えます。自分では気づくにくい、自分ならでは、具体的な才を示してくれるのです。から、心から褒められたと感じたとき、自分の心にひそむ宝ものを探し当てることになります。それをどうぞ逃さないように。

自分ならでは、を受け容れる

自分ならでは、をまずは自分自身が受け容れる。良いところもあれば悪いところもある。良いところをよく、悪いところを控えて生きる。そうすれば慎ましさが出てくるのではないだろうか。

その上で自分ならでは、の仕事と生き方を探求していく。そうすれば傍目にも嫌味のない、自然な姿が醸し出されます。人と葛藤よりも自分との葛藤、たたかい。その簡単には人に受け入れられない自分ならでは、の考えややり方。それを承知で迎える自分の道。そこに清々しさがありません。

諦観。前向きな諦めと解釈しています。自分ではどうにもならない状況を恨めしく思うより、事実として受けとめると、その先に新しい展開、未来が拓けます。前向きな諦めは潔さに通じます。阿ず、拒まず、超然とかまえて、働き生きる。

どうしようもない状況をつくった張本人が自分自身という場合も少なくありません。人間、自分の性(ぎ)が、からそう簡単に逃れられない。今ではそうわかったことが、今また、十年前にわかったと思えた。たとわかっていなくても、またいざれ認識を新たにすることもありません。

自分ならでは、の探求も尽きません。

## 5 自分ならではの究め方

- i 試練をしのぐ
- ii 直感をつかむ
- iii 偶然を紡ぐ
- iv 習慣をかえる
- v 厚意に応える
- vi 世界をかえる
- vii 節目をとらえる
- viii 学びなおす
- ix 書く
- x 自業四十年

未来とは過去の空間のことなのだ。あるいは、現在を蝶番にして、過去という空間を反転させると、未来という空間になると言っている。少なくとも人間にとっては、未来とはそういうものだ。

— 三浦雅士 天生という作品 —

試練をしのぐ

流行りのモノやコト（サービス）に乗るのは簡単ですが、いずれ廃れることは目に見えていきます。自分ならでは、のモノやコトをものにするのは難しいことです。人による先に自信と誇りが待っています。人によるこぼれる仕事、その点さえ見失わなければ、必ず顧客に出会えます。長い付き合いが続きません。なぜなら、顧客にとっても、自分ならでは、をを支えられるからです。

ただし、顧客にめぐり会うまでには時間がかかることが想定されます。おのずと精神的な不安定さが生じます。精神的な不安定さは、先の4を参考にして、経済的な問題です。現実的な不安定さといえなくことですが、それとて限りがあります。

自分ならでは、という目的を変えないためにも、やり方やプロセスは変える必要もあります。開業当初はアルバイトしていいというデザイナーもいます。講師業ではないでいたという社労士の人もいます。そこで大事なことが自律。手段のほうは楽だから目的になる可能性もある、その方が誇りという褒美はついてきません。自信と誇りという褒美はついてきません。手段が目的にならない自律心。試練をしのぐ鍵といえそうです。

直感をつかむ

ある考えが瞬間的に思い浮かぶ、思いをめぐらせていて、そうだと確信的な答が見える。それを意味を感じないはずはないと思います。違う視点や考え方の一つのこと。これまでは、場合によっては自分への戒め。内容が何であれ、掴んで離さないこと。

「なにごとにも順調に事が運ぶことはない。いずれ目先の利益に惑わされる時がくるはず。でも、けっして、惑わされまい。そうして道はずした人の例は数多」

独立の準備を進めていた時、そのことずっと頭の中を占めていたある日、まるで天が授けてくれたように、はっきりと、明確に閃いた答。その時の情景が今も目に浮かびます、よくぞ閃いたものだ。

こういうことは記録しなくても記憶しているもので、やはり書き残しておきましよう。自営業の大事な局面です。この三年後、事務所を持つとう！と閃いた。どういう未来が待っているか全く予想はできないけど、未知の世界、不安定な状況が自分の許容範囲を広げると感じて。

直感を逃さず、つかむこと。自分ならでは、に道をつけていきます。



厚意に応える

自分の知らないところで誰かが自分のために一肌ぬいでくれていて、積極的に仕事の宣伝をしている、推薦している、新しい仕事の機会を調整している、など等。そういうことを想像したことがありますか。2. の「役割の型」でも書いたように、そういうお役を自然に果たす人がいます。それもこの世の中の大事な一面。

厚意に気づく目線、厚意に感謝する心。それは誰にでも大切なことですが、自業を進める人ならなおさら、意識しておきたいもの。厚意に応えるためにも、へ自分ならではに磨きをかけていく、人のためになるよう努める、社会人として大人の振る舞いをする。そして、自分自身もまた誰かに厚意を表す。そして世の中、守っているのだと思います、けっきょくのところ。

へ自分ならではの先は遠くても、まずはその途上にあると思えるなら、必ず誰かの厚意が働いています。そういったことへの想像力、それに応えるためにはどうあるべきか。この自問は続けたいものです。

あの方、この方、厚意をうけた方を時々ふと思ひ出します。そういう時は必ず便りを出す。すでに退職した人に元同僚が転送してくれ、電話をもらった時もある。これもまた自業史のひとつコマです。

世界をかえる

社会の状況も自分自身も刻々と変化してきます。自業を始めてからおむね三年が過ぎたあたり、試行錯誤が続くうちに、様々な出来事に接し、人に出会い、学び、認識を新たにすること。実績はまだ限られますが、こういうことだったのかと、自分のこと、世の中のことにも、少し開眼する頃に、これまでとは違う、仕事の機会、世界を呼び寄せます自分自身が。

思いがけない勧めや誘い。これまでなら受け流していたことでも話を聞いてみる気になる。相手の勧めに、それもそうだと思おう。そういう時は乗ってみましょう。慣れ親しんだ世界に安住しては、創造性は拓かれません。

あえて世界を変え、緊張感をともなう状況を創る。安定した状況では出番のない別なへ自分ならでは顔がだします。他からやってこない場合は、自分から創りましょう。どのような場で、どういう仕事をすれば自業の可能性が広がるか、想像してみてください。少々の背伸びもかまいません。ともかく、そのために動いてみる。

その動き自体が波を起す。動き先ではなく、別な方向から機会がやってくるのがあります。そういう経験をするから、「偶然」を持ち出すようになるのです。



書く

「話すこと書くことは魂の労働。特に書くことが大事」

昨年来よく引用している批評家の一言で、す。たしかに、人に見せなくても、書いていくうちに、頭の中が整理され、心がいい具合に着地し、客観的に自分をみることで、できま。違。う角度から新しい着想がわくことも少なくありません。自業の道は、自身、自答を続けることになり、書かず、とを勧められたからではなく、書かざるをえなくなるはずで。

二〇〇九年七月二十八日付け日経新聞に、「『書く』と『話す』は大きな違い」という特集記事が掲載されていました。

「話す」では言葉以外の要素が重要。例えば「リーダーシップの領域なら、『信念』。例えば

「書く」では、書き手から見え、相対的に自立して、自らリアリティを追求する独自の生き物となる。例えばビジネス上の企画書が、予め企画していたように言葉が流れていかなないとが、ままある。

書いて目に見る。言葉の意味が、認識の幅を広げて、新しい世界をつくりだすこと、がある。さあ、出来事は二割にとどめて、感じ考えたことを書いていきましよう。

自業四十年

「そうか、四十年で考えればいいんだ！長い時間をかけて創りあげていくんだ！と思うと肩の力がすっとぬけました」

ある女性創業塾の帰り、駅で一緒になった三十代のプチ起業した女性。「自業四十年」がすごく印象に残ったそうです。

自業の前半の二十年は、ある種、フィールドワーク期。実践をとおして、何が、どこが、自分ならでは、なのかを、自己発見、自己認識していく期間。

前期が終わる頃には、自他ともに認める実績重なり、年齢もまた重なる。世の中も変化し、価値基準も変わる。その前に、世の中が、変わっても変らない独自の価値を備えておく。先の「学びなおす」その関所。

すぐには実利を伴わないし、腰をすえてじっくり臨めないかもしれない。腰をすえて想定されるなら、前期の早々に、日々「学びなおす」時間をおかず、時間を組み入れる必要あり。「短い時間、仕事を、浮いた時間」を「学び」にまわす。

人によるこぼれる仕事をしながら自分の価値観に合った生き方を。ライフワークといえるものに、出会って、究める。天職で、天寿を全うする。それこそ、仕合わせといえるものではないでしょう。

## 6 へ自分ならではの終り方

- i 自業は一代
- ii 恩人に報いる
- iii 頭を空にする

死の認識で深まる人生。目的を持ち挑戦を忘れず、五年か十年ごとに新しいことをやろうとしてきた。

— 加賀音彦 『空と死を考える』

自業は一代

天職は一代、自業も一代。へ自分ならではの  
 へは自分だけのもの。仕事自体は誰かがを継  
 いだとしても、同じことはできない。また  
 することもない。前の代の実践を尊重し学  
 びつつ、継いだ人は自分ならではのVを拓い  
 ていかなければならない。精神は受け継  
 ぎ、実践は創造していく。潔く、自業は一  
 代と考えて、その背中だけは見せていく。  
 親と子、師匠と弟子もそういった関係だろ  
 うと思えます。

寺子屋のような学習塾を開いていた恩師  
 と門下生たち。自宅を塾に、屋根裏部屋ま  
 で使った。試験前は泊まり込みさせて、食  
 を共にし、塾から学校へ、学校から塾へ帰  
 る。夏には大移動して海辺のキャンプ、冬  
 にはクリスマスに忘年会。いつも誰かがい  
 て勉強していた。恩師の塾。たくさんの門下  
 生の誰も同じことにはしていません。でも大  
 が教育分野に身を置いていきます。

いつか、恩師と門下生の若先生たちの輪  
 に居合わせたことがありました。定期的な  
 ミーティングだった。今後は、先生たちの  
 進捗を報告し合った。今後は、先生たちの  
 が、別の先生に何かを聞いた。先生二人  
 落とした。全員の無言の数秒。視線を下に

「君、それは質問ではなく、詰問だ」

恩師の言葉が静に響いたのでした。この  
 「詰問」という言葉が印象に残っていた。ま  
 す。そう言うことはしては駄目なんだと。  
 ミーティングそのものに大人たちの真剣な  
 姿を瞬目で目にみえた。恩師の、ものごとの本質  
 を一瞬で目に見え、心奥で感じたよう  
 分も今では思いません。

恩師の存在、塾で過ごした日々が、どれ  
 ほど自分を作ったか。それでも会社勤めしてい  
 る頃はまだ「大事に育ててもらった」とい  
 う程度。本当に目が開いたのは独立して、い  
 事務所を設けてから。「パーソナル・アシス  
 タント」は恩師の塾に原点があったのだと  
 思い至ったのでした。

そういった意味でも、独立してよかつこ  
 と。過去の現在にまた大きな意味をもつこ  
 とになる。強いて、大切にする。気持ちの度合  
 いが格段に強くなった。過去の意味。未来が  
 変ること。経験の第一弾でした。

恩師は晩年、何か書いて残そうとしたら  
 しい。でも、そうしなかつた。たぶん、書  
 こうとすると、際限なく、その根本精神はと  
 まう。簡潔すぎた。そして、その根本精神はと  
 生たちの自業が次にないです。門下

恩人に報いる

自業を進め、どう終わっていくか。大原  
則は、まわりの信頼に適う、うらぎらない  
働きをし続けること。そう考えています。

自業を四十年続けられるとしたら、自分  
の努力もありますが、その自業をよしとす  
る人がいてのこと。その第一は顧客でしょ  
うが、顧客であつてもなくとも、顧客としよ  
な面で助けになる人がいて、続いていくも  
のです。

例えば、未知な世界を伝えてくれた人。  
それまで親しみのなかつた分野の人や言  
葉、本を、初めに一つ、反応がよいとみる  
か、次に一つ、また一つ。そのうち、教える  
られてなくも、自分で探索するようにな  
る。それも見越していた様子で、どうして  
しまうという見越しての、どうと感心して

例えば、自分ならではのVを伝えてくれる  
人。自分ではまったく注目してない面を  
言葉に出してくる人。「たぶん、そうい  
うことも他の人はできない」、「それは、  
誰でもがわかることじゃない」、「人を違  
うということがある」、「これからは気に  
いた方がいい」。自分では何気ないこと、  
無意識にやっていた。自分では光をあて、意  
識させてくれ、発掘するきっかけを創って  
くれる人。

例えば、やっていることを無条件に認  
め、見守ってくれる人。顧客にもなり、応  
援してくれる人。

例えば、新しい世界に引き入れてくれる  
人。距離をおいていた世界にも自分ならで  
はVを生かす場があることを気づかせてくれ  
る人。仕事の世界を広げてくれる人。

恩人と呼ぶのは、そういう人たち。積極  
的に容認して、自分ならではのVを育んでく  
れる「プラス」の恩人たち。

一方で、「マイナス」の恩人たちもいる  
はず。自分ならではのVに違和感、拒否感を  
示し、排他的言動をとる人。精神衛生上、  
好ましい相手ではありませんが、その葛藤  
もまた、自分ならではのVに目を向け、観察  
を促す機会。後にふり返ると、おかげで、  
自分を知る時間が早まったと思えるもので  
す。

プラスの恩人による開拓、マイナスの恩  
人による掘削。両方の指揮をとり、自分の  
ものにしてきたなら、恩人たちとの交流は  
ずっと続いていくはず、ただしマイナス的  
な恩人はそうと限りませんが。

自分の道を外さず、恩を忘れず、自他と  
もに狎れず、かといって、気張らず、自分  
のリズムをふみながら、大らかに、しなや  
かに、自分の道を探究していく。それが恩  
人に報いる一番の方法。終生のテーマ。



# 自業の精神を後押しする先達 書籍

堀田善衛

- 「モンテニユ 初代エッセイストの問いかけ」 荒木昭太郎 中公新書
- 「偶然性と運命」 木田元 岩波新書
- 「カメラの前のモノローグ 埴谷雄高・猪熊弦一郎・武満徹」

マリオ・A 集英社新著

- 「いきの構造」 九鬼周造 岩波文庫
- 「風姿花伝」 世阿弥 ワイド版岩波文庫
- 「ワイトゲンシュタイン 論理哲学論」 山元一郎 中公クラシックス
- 「言語を生み出す本能」 スティーン・ピンカー NHKブックス
- 「新訳 茶の本」 岡倉天心 大久保喬樹訳 角川ソフィア文庫
- 「無の探求へ中国禅」 柳田聖山・梅原猛 角川ソフィア文庫
- 「美学入門」 中井正一 中公文庫
- 「人生という作品」 三浦雅士 NTT出版
- 「宇宙は本当にひとつなのか」 村山斉 講談社ブルーバックス
- 「偶然とは何か 北欧神話で読む現代数学理論全6章」

イーヴァル・エクランド 創元社

佐藤初女

若松英輔

堀田善衛

「本当にわたしは堀田善衛が好きなんだ……」

二〇〇八年十一月十一、十二日。神奈川県近代文学館「スタジオブリ」が描く乱世堀田善衛展。この展示会だけのために出かけた二日間。一日目は閉館までの二時間ほど。二日目は開館から昼下がりにかけて、展示が、これまで数々の展示会に出かけて、展示の中に入り込み、観たのは初めて。

両日ともに観覧者はほぼ一人。読んだ本の記憶がよみがえり、堀田善衛の歩みを辿り、この作家を知ることができたことに感謝の思い。恩師が主宰していた読書会である月にとりあげられた「若き日の詩人たちの肖像」がその始まり。以来好んで読み、全集も買ったのでした。

「日本の良識、逝く」。訃報を伝える新聞がそう書きました。宮崎駿も抛りどころにしていた堀田善衛。その一筆。

「古代ギリシャでは過去と現在が（我々の）前方にあり、従って、（我々が）みることのできるものであり、（我々が）みることのできない未来は（我々の）背後にあるものと考えられていた。これを敷衍すれば、われわれは全て背中から未来が入っていくということになる。つまり、Back to the future」

「モンテーニュ 初代エッセイストの  
問いかけ」 荒木昭太郎

モンテーニュへの思い入れが並々ならぬ。モンテーニュと一体化している。著者にとってもモンテーニュは自分を後押しする存在。著者にも共感しながら、モンテーニュの「エッセー」に、人間社会の普遍性を教わりました。

「エッセー」が書かれたのは五三〇年以上も前。でも現代を語っているのかしらと思うほど、今に通じるものがある。そしてモンテーニュの思考様式、行動様式に共鳴すること多く、まるで知り合いの語りを読んでいるような親しみ。

「わたしの思考は、もしすわらせておくと眠ってしまふ。わたし精神は、もし足がそれを揺り動かさないと進んでいかない。本なしで勉強する人びとは、皆そうだったものだ」

そう、考えをめぐらせたい時は歩く。木や花や水が視野に入る、行きなれた場所を。初めてなら風景に意識がうばわれる。

「わたしが自分の運命に対して抱くもつとも重要な感謝のひとつは、わたしのからだの状態の進行が、おのおのの部分が、おのおのの時期にうまく合致して運ばれたということだ。わたしはその新芽と花と実とを見た。そして今その枯れたさまを見ている。幸いなことだ。なぜならばそれは自然のことだからだ」

「偶然性と運命」 木田元

この本の出版は二〇〇一年四月。事務所を開いた一九九五年から六年、独立から十年、さまざまな出来事と人との出会いが自分の人生を動かしてきているとの実感を持つ頃。この本を見逃すはずがありませぬ。

中小企業診断士のことを知らなかった翌朝の新聞に、「中小企業診断士無料説明会」の小さな広告。これを見過ごしていかねば、診断士を取得することもおぼつかないかもしれませぬ。

専門学校の教壇に立ち、学生たちに最近のジュポイントと答えたと学生。何ですかに、それかと聞き返したとき、手帳に貼ったピクチャーと新聞切り抜きの裏に「入り、グメル情報の新切り抜きの裏に「入り、記事そこだけ、ラグリジュ点を解析」。記事は二分だけしか切り抜いていないの。見出し部分はきれいに切り抜いてあります。その記事は今も昔の手帳にはさんであります。

これは小さな偶然。現在も進行するも、これは大きな偶然。自分も動く。この主体的な生き方。偶然と動。この本でも、明解な答えは出ていません。

自分自身の意味づけに意味あり。

「カメラの前のモノローグ」 埴谷雄高・猪熊弦一郎・武満徹

異才たちであることは知っている、その程度なのに、この本に目がいったのは、やはり後押ししてくれそうなきがしたからです。出版は二〇〇〇年五月。

ふりかえれば、この頃は堂島のジュンク堂大阪本店内をよく徘徊していました。親しみある分野からそうでない分野へ。ぶらぶらと柵をめぐっていき、分野は異なるけれど、テーマは共通しているということがある。他の分野の知が自分の分野の助けになります。独自の性を磨く手立てになる。同質的なところからは新しいものは生まれにくく、いものでものから。

さて、本書の中で、埴谷雄高はカメラにむかってこう語っています。

「芸術とは、公表してお互いに思うことを話し合うことなんですよ。何千年の歴史のなかで、ね。芸術のいいところは、ね、くだらないことを書いても軽蔑しないこと。人間は神様じゃないからできない。ただ、努力してきた。それは、軽蔑できない。できないうえに、芸術家同士話さね、努力し合っている。そういう点を感心でね、努力し合っている。」

各々の自分ならでは、を認め、侵さないこと。常識としても良識としても。

「いきの構造」 九鬼周造

中 趣味を聞かれると返答に困ります。求職  
 書の履歴書には苦肉の策に「京都散策」と  
 が唯一の趣味とです。今では本当にそれ  
 は笑いながら、「生きていくこと自体が趣  
 味のようなものですか。」

「趣味は読書」というほど、本を読ん  
 ないし、活字が好きというほど、本を  
 せん。ただ、精神の糧になり、そう  
 求めた結果、数少ない本の読書歴とい  
 こと。自分から見つけることもあ  
 えに。教える人の選択にならなくて  
 が。そうして、手にした一冊。いき  
 がいて、それを哲学する人がいる。そ  
 かけで、目にみえないものに光があ  
 社会の知がまた一つ広がる。読んだ  
 よって、は、自負を得る。

この本を読んで思い出したこと。年配  
 知人の誘われ参加したハイキング。年  
 プのメンバは全員が長男の性。グ。ヤ  
 ヤされる中、普通な接し、さげなくお  
 かい、丁寧語で話しかける。そこに  
 の色気。媚びない。「いき」の一つの要素。

「風姿花伝」 世阿弥

人に教えてもらった本ですが、本当によ  
 くぞ二年の三月二十五日。読みながら、二  
 ○〇二年の三月二十五日。読みながら、二  
 自分にとつて「バイブル」になる本だと  
 思ったもので。人の役務にあたる仕事す  
 べてによい教えとなるはず。もちろん、生  
 き方のお手本という面でも。

この本を読んで四年後の初夏、創業塾で  
 山形市内、翌日曜日に鶴岡へ移動。土曜日に山  
 形市の塾、終了後に鶴岡へ移動。その初  
 曜日の塾、鶴岡に近づいたところで、車を  
 運転する塾主催者の方から教えるところ  
 つく「黒川能」演じてきた伝統行事。回りで舞台を

ひょっとして佐渡に流された世阿弥が伝  
 えられたのかと身をおこして尋ねてみると、  
 そうで、はい。二〇〇七年二月に「お一人さ  
 がわき、実際、二〇〇七年二月に「お一人さ  
 めて、旅したので、全体的にも有名な  
 ま「タ」で「ラン」をとり、門拳記念館も  
 ノ「タ」で「ラン」をとり、門拳記念館も  
 ノ「タ」で「ラン」をとり、門拳記念館も  
 訪ね、館内を独り占めして。

「黒川能」のことを聞いたおかげ、今も縁  
 はつながっています。



「新訳 茶の本」岡倉天心

記録してないけど記憶している一つに、大それた想念があります。夜の帰り道、自宅に着く手前の車道。信号待ちをしていて、青に変わり一步踏み出した瞬間、

神は自分の中にある！

何を考えていたのかは思い出せません。たぶん自分を問うたような状況や出来事があったはずで、駅から立ちどまり、頭の中も少し落ち着いて、まとまりのない考えをまとめようとしていた。信号が変わり、チが入った。一九九四年頃のピタツとスイッ

その後事務所をもち、様々な人と行き交ううちに意識する、自分の内に根をはる空気感。それが道教的な自然観に通じるように、それだと思いたったのが二〇〇三年春。先の大それた想念からすると十年後のこと。

禅もまたしかりで、茶道は禅の精神を形にしたようなものだから、有名なこの一冊を手がのびたのだと思います。自分ではやろうと思いませんが、茶道の真髄に共感。自分なりに次のように解釈。

「日常のちよっとした時間」を「われにかえり」、宇宙を感じた時間」を「われにか

「無の探求へ中国禅」

柳田聖山・梅原猛

この本を買ったのは二〇〇八年。しばらく熱心に読み書きをしたものです。ただし、中断したままですが。

禅の起源は、古代インドのヨーガ

禅は、実践的な関心から出発

ゆえに思想の形成に体系的な立場をもたない  
 仏教の体系の全てを禅の思想とみてもかまわないが、反面、イコールとはならない

さらに、一般に禅の思想とみられているものは、ほとんどが「老荘」、あるいは「儒教」の思想

ノートには「高僧伝」のことや語録をいろいろ書き写しているのですが、内容は全く記憶なし。ただ、智恵とは心の安らぎをもたらし、たまたまの、と自分なりの解釈できたことが収穫。ノートの最初は、本冒頭「はしがき」の「梅原猛」の弁。

「私は、私ながらに、禅の中にすばらしい精神の光を見いだした。その光の中心には「自由」ということばがあった。（略）そこには、否定すべからざる、人間の尊厳の自覚の主張がある。各人が皆、自由な仏性をもって覚えているのである。その仏性を、個性的な仕方である」

「美学入門」中井正一

今さらながらに、貴重な本たちを教えてもらったと感謝しています。人との出会いは、異なる知との出会い。人が人の可能性を拓くという、一つの典型。自分にはない考え方を知り、親しみのなかつた本に接点をもち、そこから自分の知が拓かれる。あの方、この方と、顔が浮かびます。

この本を買ったのは二〇一〇年七月十二日。小さな文庫本が、大理石の小箱のように見えます、読み終えると。

「大体人々は価値あるものとして、真実であること、善良であること、美しくきれいだこと、善良であること、美しくきれいだこと、その真実について学ぶのが、哲学、論理学であり、善良であることについて学ぶのが、倫理学であり、芸術とは何であるかを考えたが、ねてゆくことが美学なのである」

「自然に触れることで、自分の本当のあるべき、守るべき姿にぶつかり、本当の自由な自分、いとおしむべき、健康な、大切にすべき自分、気がつくことは、大変なことである。死んでも守らなければならぬ自分、発見する」ともあるのである」

本の解説者は最後に、「中井にとつて、本当の自分に出会うことが、芸術を作る営みであり、あるいは自分らしい生き様を示すことでもあるのです」。同感。

「人生という作品」三浦雅士

新聞の書評に載ったタイトルをみて、興味をもった本です。ただ、読んだのは冒頭の序章のあたる部分だけ。そこに全てのメッセーが凝縮されていて、以降の六章は、その解説という感じがしたので、その序章はページ番号三から二十六の分量。その最後の部分に、今さらながらに目が開く感覚をおぼえました。

「未来とは、過去の空間のことなのだ。あるいは、現在を蝶番にして、過去という空間を反転させる。未来という空間になると言ってもいい。少なくとも人間にとっては、未来とはそういうものだ。」

むろん、過去はすでに決定されているし、未来は、何も決定されていないと、言うだろう。だが、そうではない。過去は少しも決定されていないし、逆に未来はすでに決定されている。言ってもいいのだ。人間の自由はむしろ過去へ向かって開かれていく。人はただ、歴史を書き変えるように未来を書き変えるのである」

経験的にもわかったことは、過去の名残のものを処分する気になつたら、それはまた新しい未来が開いた証だということ。過去の内容と意味合いがこれから変わるといふこと。処分するといふことも、過去がなくなるわけでもないし、それらを包含して、新しい次元に入るといふことです。



佐藤初女

「リーさん、佐藤初女さんってご存知で？ 本  
当にすてきな方ですよ。もうずいぶんご高齢な  
ので、早いうちに一度会われたい」

二〇一三年の年末のこと。初めて聞いた  
名前でした。すぐにネットで検索。すべて  
において「自然」を大切にした営みの中で人  
を癒す場「森のイスキア」を主宰。こうい  
う方がおられたのだ。：と知らなかったこと  
を恥じるような気持ち。

請われれば遠くへも出かけて講演。ぜ  
大阪にもと定期的に情報検索して、ひ  
やうきましました。その時、二〇一四年六月  
二十八日土曜日、午後一時、堺市総合福祉  
会館。イスキアの集い実行委員会が開くも  
の。八回目。大阪にも熱烈な共鳴者がい  
た。人は出かけてみると、広いホールが満  
員。人が人を誘い、集ったという感じ。満  
員に「地球交響曲第二番」の上映。佐藤  
初女さんの「地球交響曲第二番」の上映。佐藤

続いて登壇された佐藤初女さん。映画の  
時からあす。と、あまりに小さくなられてい  
て、ああ。と。老いと残酷なこと。し  
精神はいよいよ解かれていき、さりげない  
一言に説得力と真理あり。その一つ。

「何気なくやって人に喜ばれること、それが本  
もの」

若松英輔

日経新聞夕刊の連載「プロムナード」で  
初めて知った批評家。二〇一五年一月八日  
のタイトル「悲しみの秘儀」に目がとまっ  
たのです。

以来、最終回まで、ずっと読みました。  
一五〇〇字ほどの限られた枠の中に、目  
に見えないものを、昇華した文章で目  
に見せてくれる。一文字一文字の才が浮き  
立ち、研ぎ澄まされた文章。何年かけても  
書き表せないこと、これを上ふさわしても  
表現はできないと思わせる。ただただ感嘆する  
ばかりでした。

連載が終わり、残念な気持ちで検索した  
ホムページ。そこに「クイベント」の案  
内。二〇一五年七月十五日水曜日、ジュン  
ク堂大阪本店、午後七時。定員は二十名ほ  
どの小さなイベント。さっそく申し込み、ほ  
席を確保。ほんの三メートルの距離で話し  
を聴き、質疑応答では少し話もできた。  
頭も体も清められた気持ちの帰り道。

貴重な言葉を聴けた中でも、わが身に合  
点があった一言。

「話すこと、書くことは魂の労働です。特に書  
くことが大事。人に見せても見せなくても、書  
くこと」

あとがき

過去の年数が増えてくると、ある節目で過去をとりまとめたくなくなるのは人間の習性でしようか、それとも、これもまた自分なからではVでしようか。二〇〇一年七月に冊子にした「哲樂の中庭」から十二年後の二〇〇三年暮れから、またそういう思いがわいてきたのでした。

自分の問い続けてきたこと、実践してきたことをなるべく一般化して書こうと試みた。たどった。だから書きよどんでしまっただけで、持ち越してきた。これでは先に進まないの、この春で区切りをつけるところにしないの、この抄録です。

「ガムシヤラに、なんて、そんなことしなくていいよ、これまでどおりで」

会社勤めの最後の会社の先輩。事務所開設を決めて、物件探しを始めた。事務所五年。二月中旬。あの阪神あわじ大震災が発生。神戸の自宅が被災し、梅田でホテルに住まいと食った先輩が、一人ではつもらない。打ち明け、誘って、どこか事務所開設を、人生はじめて「どうなるかわからない」と話した。ことへの返し。

ちょっと意外な気もしました。あっ、わかっちゃいるんだ。自分じゃない。ガムシヤラ、たぶん、そうじゃない。ガキ大将の、小さいことには頓着しない。見直した感。冷静な目をもっているように

この十年後に五十五歳の若さで逝ってしまった。折にふれ、甦ります。「これまでどおりで」。

「けっきよく結婚して平凡に生きていく？ いや、それはないと思うよ」

「もったいないから止めた？ そういうことをしてはいけない。少々費用はかかって、自分がそう思ったなら、そうしないといけない、君は」

独立するずっと前、ほんの雑談の中で別々の人から言われた言葉です。三人の人の先輩たちは何をどう見て、そう言えたのか。独立した。今では同じようなことをかっています。この抄録もその一環です。二〇一六年四月二十二日